

第 32 回 北海道建築賞・北海道建築奨励賞 審査経緯

第 32 回北海道建築賞は、新しい北海道建築賞表彰規定（2006 年 4 月 27 日改正）に基づき、2007 年 4 月中旬の応募開始から始まり、授賞式・記念講演会に至るまで、従来とは異なる日程で始まった。

応募作品と委員推薦作品の公平を期するために、応募期間中の 4 月 20 日、札幌市内での委員会において委員推薦候補作品を選び、事務局から各設計者に正式な応募手続きを依頼した。

本年度の第一回審査会は、全委員参加のもと 2007 年 5 月 29 日に札幌市内で開催され、全委員同意の下に以下の審査対象 13 作品を確定した。そのうちの 6 作品⑧～⑬が委員推薦による応募で、⑧～⑪は支部主催の「建築作品発表会」参加作品でもある。下記の表記中、作品名に続く（ ）内には、主たる設計者である応募者氏名と同所属名を記した。

応募作品（順不同）：

- ① BYO-BU（君 興治君／(株)君工務所）
- ② 函館市臨海研究所（山内一男君／(株)建築企画山内事務所）
- ③ 大成札幌ビル（高橋章夫君／大成建設(株)）
- ④ 月寒の長屋（名古屋英紀君／エープラス名古屋英紀建築設計室）
- ⑤ GLASS&WHITE（豊嶋 守君／(株)画工房）
- ⑥ テスク本社ビル（豊嶋 守君／(株)画工房）
- ⑦ 海の崖っぷちの SOHO（戸島健二郎君／戸島健二郎建築設計）
- ⑧ 北海道薬科大学臨床講義棟 C（佐藤 孝君／北海道工業大学）
- ⑨ 帯広市図書館及びび一連の図書館建築（下村憲一君／(株)環境設計）
- ⑩ 当別田園コート（小室雅伸君／(有)北海道建築工房）
- ⑪ ゲストハウス「ポエティカ」（畠中秀幸君／スタジオ・シンフォニカ(有)）
- ⑫ 情緒障害児短期治療施設バウムハウス（藤本壮介君／藤本壮介建築設計事務所）
- ⑬ 函館市中央図書館（佐田祐一君／(有)佐田祐一建築設計研究所）

引き続き第一次書類審査に移り、現地審査対象作品が選考された。

最初に、作品選考審査の方法として、多数決ではなく議論を通じて全委員の同意を得ること、その評価の視点は、コンセプトと設計プログラムおよび実体的表現の「先進性」、時間・空間軸における自然を含めた人間社会に対する「規範性」、それらを統合して美の創造を目指す「洗練度」、とすることを再確認した。

各委員の個別評価と活発な議論の末に、現地審査に値する作品として、③大成札幌ビル・⑧北海道薬科大学臨床講義棟 C・⑩当別田園コート・⑪ゲストハウス「ポエティカ」・⑫情緒障害児短期治療施設バウムハウス・⑬函館市中央図書館の6作品（順不同）が選定された。

今年度から実施された新日程の利点を生かして、現地審査は委員7名全員の参加を原則として3回に分けて実施された。第1回は6月27日に札幌市内の③大成札幌ビル、第2回は7月28日に札幌近郊の⑧北海道薬科大学臨床講義棟 C・⑩当別田園コート・⑪ゲストハウス「ポエティカ」、第3回は8月10日に伊達市の⑫情緒障害児短期治療施設バウムハウスと函館市の⑬函館市中央図書館で行われた。いずれも天候に恵まれ、事務局を含め8名で周辺環境から建築空間の内 外まで詳細に観察し、設計者やクライアントとの意見交換を含めてたいへん有意義な現地審査となった。

9月12日、第二回審査会が札幌市内で開催され、全委員出席して現地審査作品を対象に最終選考が行われた。全委員が個々の作品すべてを実体験するという共通の基盤が整った今回は、対象作品ごとに各委員が現地審査に基づく意見を述べた。その後、受賞作品選考のための自由討議に移り、多角的な視点からの活発で真剣な議論のなかで個々の作品の評価と意義が整理され、全委員の総意として受賞作品を決定した。以下の三賞である。

北海道建築賞に「函館市中央図書館」佐田祐一君／(有)佐田祐一建築設計研究所

北海道建築奨励賞に「大成札幌ビル」高橋章夫君／大成建設株

北海道建築賞審査員特別賞に「当別田園コート」小室雅伸君／(有)北海道建築工房

この三作品は、先進性・規範性・洗練度の全てにおいて高次元の優れた建築作品と各委員が一致して評価した。その他の三作品については、それぞれ秀作ながらもいくつかの問題点が指摘された。以下にその要点を述べ今後の活躍に期待したい。

北海道薬科大学臨床講義棟 C：ボックス構造の操作による吹抜け空間と大きなガラスのカーテンウォールの構成には先進性と洗練度を認められるが、ラーメン構造との併用が曖昧で完成度が低くなっている。キャンバス全体の中での位置づけが明確ではなく、アプローチの構成と表現に問題が多く規範性の弱さが指摘された。

ゲストハウス「ポエティカ」：自然の木立の中に演奏ホールとゲストルームを持つ極めてシンプルな構成には、内外ともに潔さが表現されている。音響には細心の注意が注がれている反面、建築自体の空虚感が指摘された。音楽の豊かさを建築表現に転化できたとき、その洗練度も一層高まっていく。

情緒障害児短期治療施設バウムハウス：第30回北海道建築奨励賞を受賞した作者は、先進

性・規範性・洗練度においてさらに進化した作品を実現した。内部空間の先進性と洗練度は特筆されるが、その空間構築手法に内在する外部との関係性の希薄さが規範性の弱さとして指摘された。

昨今は、地球温暖化に伴う環境問題や社会全体の規範性の欠如から未来への不安感が広がっている。このような社会状況のなかで、コミュニティ構築の中核装置としてコミュニケーションの場を創出し続ける建築本来のあり方が、極めて重要な時代となってきた。今回の審査では、そのことに真正面から取り組んでいる建築の持つ力強さと美しさ、設計者の強い信念と深い努力を実感することができた。

(文責 大萱 昭芳君)

第 32 回 北海道建築賞

佐田 祐一 君 「函館市中央図書館」の設計

函館市中央図書館は、かつて道南の行政の中心を任う旧北海道渡島支庁舎の跡地に公募型の設計プロポーザルで選定され実施された作品で、函館市の史跡であり、公園の性格を持つ五稜郭に隣接して建つ。

三角形の変形した敷地は、最長辺を交通量の多い幹線をはさんで五稜郭公園に接している。いかにも窮屈な利用勝手の悪い敷地の形状は、平面計画上大きな制約になっている。

利用しやすい図書館を目指した建築は、1階部分の面積を平面計画上最大限に確保しようとしている平面計画から窺える。結果、外部にまとまったオープンスペースを設けず通り庭的な建物に沿ったオープンスペースを設け、五稜郭公園に向かった低いスケールのレンガのファサードの構成が程良いヒューマンなスケールの風景を生み出した。

正面玄関を入ると光庭を囲んだ空間には、多くの利用者が様々な姿勢でベンチやイスでくつろぐ姿がある。あえて内側の光庭に向けたロビーの空間は明るく、心地よく、軽い飲食やおしゃべりも受け入れられ、利用者にとって肩の張らない敷居の低い、開かれたこの図書館の性格を示している。

敷地の三角形の形状に沿わせた開架閲覧空間を、最短部 9 m、最長部 37 m 程の大きな三角形の平面を持つ迫力のある大空間として現出させた。平面形状からくる窮屈な印象に比べ、建築外部の構成からの要素も大きいはずであるが、大変落ち着いた豊かな空間となっている。三角形の頂部から広い辺に向けて、徐々にせり上がる屋根型に沿って空間が構成され、空間のボリュームの広がり、パースペクティブとの逆の効果として、不思議な空間の納まりとなっている。利用するものには変形した空間を感じさせない。

ボリュームの豊かさは、同じ空間を利用する多数の利用者にとっても、本を選び、本を読み楽しむ空間として、快適な時間を過ごすことのできるバランスの良い空間となっている。長い壁面にはお話し空間や地域と密接した函館コーナーなどの小空間が入れ子様に構成され、外部との関係を持った変化にも富んだ小スペースを数多く生み出している。

プロポーザルコンペ以前から市民レベルの参加を見ながら、高度に形成された図書館利用の計画は、この建築の中で素直に実現されているように感じた。結果、この図書館の日常の利用者は大幅に増加している。

この図書館の持つ複雑な建築プログラムを、無理せず解決し魅力的な建築として生み出した

設計者に、図書館建築への豊かな経験を感じる。

公共建築の在り方が問われている。来館者にとって求められる利用価値の高い機能を、質の高い空間との中で実現させた優れた公共建築として高く評価したい。

(文責：鈴木 敏司君)

第 32 回 北海道建築奨励賞

高橋 章夫 君 「大成札幌ビル」の設計

「京都」（京都議定書の意味）をどのように達成するかという問題だけでなく、地球環境問題は今や建築を考える際にも必須の配慮事項である。建築は、その立地条件によってそれぞれ異なる環境への負荷をどのように軽減するか個別の対応が求められるのが特徴でもある。

「大成札幌ビル」は、真正面よりこの問題に取り組んだ作品である。

環境に対する配慮について建築を計画・設計する際に考える場合、それは、何か1つの技術で解決できるわけではない。断熱、冷暖房システムといった室内環境技術だけではなく、それらを効率的に生かすことのできる構造、意匠の技術も同時に用いることができなければ、真の環境配慮型建築は生まれない。

「大成札幌ビル」では、外皮を取り巻くコンクリートの壁は、きわめて高い制震性能を持つ構造体であり、必要最小限にしばられたスリット状の開口部は、熱損失を極力防ぐための構造と意匠からの解答である。しばられた外光を確保するために中心部に設けられた吹き抜けには、トブライトと太陽光自動追尾型採光装置より、柔らかな光がほぼ無柱に近い執務空間に適切に届いている。また、内装がほとんどない室内には、床に埋設された冷温水配管を施し、熱負荷の大きいコンクリートの躯体を使った躯体蓄熱放射冷暖房を行い、さらに床全面吹出空調システムの採用により気流を感じない快適な室内環境を達成している。さらに、平面計画として、固定化されないワークスタイルの実現を図るためにユニバーサルで、可変のオフィスレイアウトを行い、ユーザの利用の変化にも追従することを目指した新たな事務所空間が実現している。

環境への配慮といった時にもう1つ重要なこととして、建築の周辺環境に対してどのような配慮がなされているのか、街並み・景観、あるいは地域の持つ独特の文化への配慮という点がある。CASBEEの評価項目を考えてみてもこの点に関しては、もう少し積極的な提案があってもよかったのではないだろうか。

いずれにしても、このように意匠、構造、設備のそれぞれの技術が、どの分野にも偏りはせずに、適切なアセンブルを行って1つの建築空間が実現していることは、それぞれの個別技術に高い技術力と持っているのと同時に、アセンブルされた技術の積み重ね、組み合わせが快適な建築空間をもたらすことが出来るという洞察力と構築力の高さがなければ実現しなかったであろうし、その点が高く評価される部分である。

差し迫った地球環境への配慮という命題に、北海道という地域に建つ建築の1つとして真摯

なまでの取り組みをした作品として、北海道建築賞奨励賞を授与し高く評価するものである。

(文責：小篠隆生君)

第32回 北海道建築賞審査員特別賞

小室 雅伸 君 「当別田園コート」の設計

JR 学園都市線と並行して、前面道路と背後の山並に挟まれるようにして、銀色の切妻屋根が数軒適度な間隔を空けながら横 に長く連なっている。当別田園コートは、この軒の連なりのひとつとしてある。敷地幅一杯に広げられた間口は 30m にもおよび、周囲と連続しつつも一般的な住宅のスケールを超えた伸びやかさを感じさせ、それは何か“村の小学校”のような、質素でありながらも規則正しい律儀さを伴った佇まいにも見える。

建築の設計行為とは、様々な水準での条件を解くことでもあるのだが、この住宅の設計条件は大きく 4 つにまとめられるものであった。つまり、①画家夫婦の アトリエ兼住居であり、かつ息子夫婦の週末住宅でもあること、②豪雪地帯における雪の処理、③断熱を含めた構法的合理性、④銀色の切妻屋根をルールとする 建築協定、である。ここでの設計作業は、各々の条件にひとつずつ丁寧に応えて積み上げていくというよりは、4 つの条件に対し同時に「解」を導くような地点 を探ることであったのではないかと思われる。ある意味で大雑把に見えなくもないシンプルな住宅ではあるのだが、ここでの建築的操作は、4 つの条件に複合的に応えるものとなっている。例えば、6×30m の細長いボリュームは、集成材フレームの 3×3m をモジュールとしつつ、切妻屋根からの落雪を幅広く分散させるための長さでもあり、ふたつの家族の空間を成立させる“距離”ともなっている。また、落雪によって開口部が埋もれることのないように、連続した高窓から十分な光を取り入れつつ、2ヶ所に挟られたテラス部分に掃き出し窓を限定し、同時に、このテラスによって 24m の長さの空間が緩やかに分節され、要求された生活空間としての機能にも対応している。建築協定のルールも元来は景観の問題として設定されたものであろうが、ここでは構法・雪の問題としても解かれているわけである。

つまり各々のデザインが有機的に関連しあいながら、4 つの条件に対する“合理的”な「解」として全体が成立しているのであり、ディテールや家具に至るまで余計なものがない。作者の長年にわたる試行の蓄積と相当なスタディの裏打ちがなければできないことだろう。そういう意味において、小品でありながらも力強い説得力があり、北海道の住宅作品としてのひとつの到達点であるともいえるかもしれない。

重要なのは、北海道の建築としての“作法”のようなものを鵜呑みに前提とすることなく、とってそこから遠く離れることもなく、特殊な環境的条件を含めた様々な条件を素直に吟味し、それに的確に応答しながら全体を構築していこうとする設計の姿勢であるように思う。そ

れは、情緒的あるいは抽象的な既成概念に頼ることでもなく、単なるテクニカルな処理に留まることでもなく、建築デザインを広くそれぞれの地域性へと開いていく契機ともなりうるものだろう。結局のところ、地域性の表現とは、常々の深い洞察からしか生まれ得ないのである。

(文責：山田 深君)